慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	赤川武助「僕の戦場日記」論：手続きとしての「宣撫」
Sub Title	
Author	五島, 慶一(Goto, Keiichi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2006
Jtitle	三田國文 No.43 (2006. 6) ,p.1- 14
JaLC DOI	10.14991/002.20060600-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20060600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

赤川武助「僕の戦場日記」論

――手続（プロセス）きとしての「宣撫」――

五島慶一

一　初めに

赤川武助の（作家としての）キャリアの出発点に関して、精確なことは未だ知られていないようだ。しかし、昭和十二年の『少年倶楽部』（大日本雄弁会講談社、以下「講談社」と略記）誌上に「友情航路」（七月）「輝く日本選手」（八月増刊）「燃えよ日本の血！」（九月）と、単発ながら連続で発表しているのはその中で比較的早いものとして位置づけられるだろう。更に翌年には同誌に「源吾旅日記」を通年連載、その翌昭和十四年十月から中支に出征し、帰還後その体験をもとに綴った「私の戦場日記」はやはり『少年倶楽部』昭和十六年二～九月に連載され、それがすぐ十月には『僕の戦場日記』と改題・増補して講談社から刊行、しかも同書はその年度対象の第一回野間文芸奨励賞（同社主催）に挙げられている、といった具合に、彼は謂わば講談社に見出され、育てられた作家であると言って過言ではないだろう。[1]

この時期、即ち戦中期の講談社は所謂大政翼賛――「国民」の戦意高揚施策に最も協力的な出版社の一つであり、特にその宣伝（喧伝）面では寧ろ積極的に先導役を果たしたことは夙に諸氏により指摘されている。当然赤川もこの後『少年倶楽部』を中心に、他に『キング』『海軍』『若桜』等の同社雑誌でもそうした記事（訪問記等）・創作を量産してゆくことになるのだが、ここでは彼にとってそうした意味での謂わば原点とも言える「僕の戦場日記」について、『少年倶楽部』連載時から引き続く読者への意識をも視野に入れつつ分析を進めてゆく。[2]

二　記述の視点

十月×日（輸送船にて）／　私たちの船は、毎日々々揚子江をのぼつて行く。私たちは少したいくつしはじめてゐる。

これがこの作品の冒頭である（引用中の斜線は原文での改行。以下同じ）。やがて程なく「私たち兵隊」と出てきて、それがどのような集団の範囲を指示しているのかが明らかになるのだが、この物語がこのように「私たち」の記述に始まり、（単行本では）最後も「私たち」の進路を示して終わっている

（後述）点は重要だ。輸送船に乗せられた「私」を含む兵たちは、「揚子江をさかのぼりつゝ」（これは第一章／掲載第一回[3]のタイトルである）自分らがどこに向かっているのかを正確には知らない。これは作戦遂行上、末端兵士にはその詳細を知らせる必要はない、あるいはその方が却って都合が好いという発想の結果としてあろうが、このことに関して本文は次のように記述する（傍線引用者、以下同じ）。

しかしそれは、私たち兵隊が勝手にさうざうしてみるだけのことで、けつきよくのところは、どこだかやつぱりわかりはしない。私たちにわかつてゐるのは、たゞ『中支の奥地』といふことだけだ。そして、じつさいは、それはどこでもよいのである。私たちはただ命令のまゝに戦場へ行き、敵と戦ひ、そして勝てばそれでよいのである。だから、このごろでは、そのことは誰も口にしなくなつた。私は時々思ふことがある。（「揚子江」[4]）

これより、「私たち兵隊」は軍組織（上部）の論理を無批判・無前提に受け容れ、（結果的に）それを体現していることがわかる。目の前の状況に対処・順応することがすべてである兵たちは、それ故この状況に「少したいくつしはじめ」る。これは、赤川と同じく野間文芸奨励賞受賞（第二回）作家である棟田博が少し前に書いていた、一般（非児童）向けではあるがやはり戦場日誌的な『分隊長の手記』[5]の中で、「僕」とその仲間が巡察中にうけた敵襲から身を守るために避難待機する――その真っ最中に「怠屈（ママ）」を感じているのと同じ構図・理由である。そこでの「僕」もやはり末端の一兵士（但しここに、分隊長という職掌が加わる）として、唯眼の前の状況に対応してゆくことを行為の第一義――至上命題としていた。そこ（同作中）ではっきりと打ち出されていたように、戦場の一兵士にとって、自分（たち）の行動の意味やより大きなところで動いている出来事の意義について考えることは、無益であるのみか時に有害なのである。この論理（原理）は、指導者連中――大局での戦争遂行者、具体的には軍部中枢及びそれに近い政治家・上級官僚など――にとって好都合であると同時に、兵士たち自らが（時に無意識ながら）主体的に選びとった態度でもある。

しかし、狭義の戦闘要員として自ら前線に赴く一兵士であると同時に、後に巡察係から転じて宣撫班付を命じられることになる（「僕の戦場日記」に於ける）「私」は、その地点にのみ留まることはできない（当然のことながら、少くとも発表されたものとしてのこの物語は事後的に書かれたものである）。先の引用で言えば「私は時々思ふことがある。」のように、「私たち」主体の記述の中に、「私」の視点は適宜入りこみ、譬喩を以て言えば、これらがそれぞれ経と緯としてこの物語を織り上げている。次に引くのはこの作品（単行本で）の末尾だが、やや先走ってこの部分に関して述べておけば、それは自分に対して特別に与えられた任務を果たした（元）宣撫班員（あるいはその複数形）としての「私（たち）」が、また当初と同じく兵士の群れである（集合体としての）「私たち」の中へ組み込まれてゆく――そのようにして「前線へ」と向かう／送られてゆ

く様子をよく示している。

あゝ、私たちの長い間の宣撫の仕事は、どういふ成績をあげたかはしらない。しかし、この幼蘭のことを思ひだすだけでも、私の心はあかるくなつてくる。／　○○県城の人々よ。どうか元気で日支親善、東亜新秩序建設のために進んでくれ。ふたたびあふ日が来るかどうかはわからない。だが、私は私の命のあるかぎり新東亜のために戦はう。そして、君たちのことを、命のあるかぎり思ひだすだらう。／　私は露営の幕舎を出て、つゆ深い草の上に立つて空をあふぐ。明日も天気だらう。私たちは私たちをまつてゐる戦友たちのところへ急がなくてはならぬ。／　前線へ。前線へ。」（第十二章「姑々焼火（クシヤオホ）」中「一路平安（イールピンアン）」）

以下、部隊としての移動や駐屯等の記述には「私たち」、そこでの個人的見聞や個別の任務に関しては「私」が使われている。これは国語レヴェルで自然なことではあるが、この使い分けは内容とも関聯して一種の対照を構成しているようにも読みうるのである。即ち、「私たち」の記述に従ってこれを読むとき、この作品はこれより以前に主に一般（大衆？）向けとして氾濫していた従軍「日記」（形式作品）の、低年齢向け亜流であるに過ぎないことになるが、同作がより「少年」向けである所以は寧ろ「私」（によるものとして）の記述の中に多く見出されるのである。

具体的に、作中「私」の眼はしばしば大陸の子供たちに向けられる。次に引くのは第二章（連載第二回）「焦土の子たち」冒頭部である。

十月×日（湖北平野の中にて）／　私たちは、やうやく私たちの戦場へ、やつてきた。日本を出てから、おほかた一箇月にならうとしてゐる。（略）／　私たちは、この平野の中を通つてゐる一本の鉄道と、その鉄道を中心とするこのへんの地方とを、まもることになつたのである。／　私は漢口に上陸して、はじめて支那の土地をふみ、支那の人々を見た。／　それらについて、私はまだ多くのことを知らない。が、上陸してからこゝへ来るまで、わづかの期間ではあるが、その間にふかく感じたことがある。それは、支那の子供のことである。（「財布売りの少年」）

先に引いた輸送船上の「私たち」の様子から「私」とその周囲へ、という視点の移行はこのような形でなされており、以下「私」の見た物売り・物乞いの少年少女たちの幾つかの（群）像が描出されるところとなる。それらを見た「私」は、この章の言わば纏めとして、次のような感慨を洩らす。

たゞ私が、これらの戦争にいためつけられた不幸な少年少女たちを見るたびに、ふしぎに思つたのは、彼らがあんぐわいにのんきな顔をしてゐるといふことであつた。（略）／　これは祖先の代から戦争や天災のつゞく不幸な国に生まれてきて、しぜんにきたへあげられた『ねばり強

さ』だ。／　私は今後もたくさんの支那の子供を見、いろ〳〵新しいことを知るだらう。けれども、今日までに得たこの考へは、きつと、いつまでもかはらないであらう。
　将来、日本の少年は、この支那の少年たちと手をとり合つて美しい東亜をつくつて行かなくてはならない。／　だが、どんなことがあつても、この支那少年のふしぎな『強さ』をわすれてゐてはならぬ。／　愛する日本の少年たちよ。
　君たちはしあはせだ。支那の子供は何も知らずに『蔣介石はえらい。』と思つてゐたり、何のために自分たちが不幸になつたかも知らずにゐたりする。これからどうしたらいゝかといふことも知らないだらう。だが、日本の少年は、そんなことはよく知つてゐる。戦争だから、いろ〳〵な不自由や苦しみはあるにしても、諸君は日本が何のために戦つてゐるかを知つてゐる。そしてまた、東亜新秩序、ひいては世界新秩序建設のために、あくまで戦ひぬかなければならぬといふことを、よく知つてゐる。これは、しあはせなことだ。（略）／　君たちはあくまで正しくなければならぬ。それと同時に、あくまでも強くそだつて行かなくてはならぬ。（「シロヂニアカク」）

ここで二つのことに注意したい。一つには、支那（作中表記に従う、以下同じ）の子供たちを見てきた「私」の視線は、ここに於て急遽それを超えて「日本の少年」へと至り、彼ら、即ちこの作品――初出誌『少年倶楽部』及びその延長線上に位置づけられる単行本――の読者に親しげに呼びかける姿勢が採られていること。そしてもう一つは、今の記述からも分かる通り、そこでの呼びかけ――期待の対象が「子供」から「少年」へと限定されている、つまりそれまでの記述にあった「少年少女」から、ここではそのうち後者が排除されているということである。[6]

ここには、二方面に亙る差別を前提とした、一つの共同体が仮想されていることが見えてくるだろう。則ちそれは、「日本が何のために戦つてゐるかを知つてゐ」て、そのための現時の協力・将来への準備を共に怠らない「日本の少年たち」――これがすなわち（理想像としての）「少国民」であろう――という集合的な像である。そこからは（「兵士」として）直接に国家的事業（現時でのそれは戦争）に加わることがない（とされた）「少女」は排除されると同時に、「これからどうしたらいゝかといふことも知らない」「支那の少年たち」は共同体内の下位に属するものとして、（この論理上は）自動的（つまり強制的）に取り込まれることとなる。この内部での差別化（二層構造）についてここには判然とは書かれていないが、これが隠蔽の典型的なレトリックによることは言うまでもない。それは膨張を続ける大日本帝国が、朝鮮・満州・台湾の人々を「日本人」化しながら、「内地人」とは異なる処遇を（公的制度、及び社会慣習・市民意識の両面に亙って）与え続けたことと全く同じ範疇にある。ただ、ここでは想定読者対象の年齢層が比較的低いことと、それ故直接的な利害（例えば公民権など）の絡みが少ない分だけ、協同（――対等）の仮面が強く働いている

のだろう。そしてその取り込みのために必要な手続き――手段こそが「宣撫」なのであった。

尚、ここに出てくる「新秩序建設」は、同時代頻繁に用いられたスローガンの一つであり、（戦争による）大陸への進出を語る（正当化する）際の合言葉であったと言ってもよい。後に元（本文の記述つまり日本側の見方に従えば「にせ」）県知事として捕えられ、取り調べの上釈放されて以降日本軍の協力者となった周文化（チュウウェンホワ）が宣撫班に挨拶に来た折も、彼は「抗日の夢など、すつかりさめました。これからは日本のかたがたと手をにぎつて、東亜新秩序建設に進みたいと、心から考へてをります。どうかよろしくお願ひいたします。」と述べている（第十章「とらはれた県知事」中「周文化」）。

「私」の叙述であるこの作品の地の文に於ても、この言葉は屢見られる。その意味でこれは同作を一貫するテーマであると言ってもよいだろう。例えば後に詳しく見る通り、「私」は当初から宣撫班員として出征して来たわけではなく、そこに配属される前には一日（夜）だけ巡察係の勤務に就いている。鉄道を中心にその地方の警備にあたるという任で、それについて「私」は次のように感慨を述べていた。

大陸へきてゐる日本軍は、ぜんたいからいへばずゐぶんたくさんの数であらう。けれども、なにしろ支那は広いのだ。これでは、なるほど敵がまだいくらでもはいつてくるわけである。この敵を、わづかの人数でうちはらひ、広い区域をまもり、こゝに新秩序をうちたてようとする警備隊の苦心は、内地で考へてゐた以上のものだ。新秩序をつくることのむづかしさは、こゝにもあつた。

私は、重い、そしてそれだけにやりがひのあるこれからの任務を思ひ、今さらのやうに心がひきしまつてくるのである。（第三章／回「軍曹の戦死」中「匪賊の話」）

結論を先取りすれば、「私」の叙述（記述）は先述のような「東亜新秩序、ひいては世界新秩序建設」といった（半ば妄想的に）巨大な概念から、一地方の勢力図の塗り替えという中規模のものを経て、個別の人心改め（宣撫）という小さな、しかし場合によっては最も深い対象へと向かっていき、そして先に引いた物語の最後ではまた再び「日支親善、東亜新秩序建設」という最大限のところへと帰還してゆく、そのような運動として見ることもできよう。

三　「宣撫」という欲望、その振れ

十一月×日（○○県城にて）／　私は今、宣撫班の寝室のすみにすわり、あき箱を机に、くらいらふそくの灯の下で、この日記を書く。／　私たちの宣撫班は、今度部隊がこの地へ来てはじめてつくられたものである。班員は兵隊ばかりだ。（略）／　今、私がこれを書いてゐるそばに、みんなは毛布にくるまつて眠つてゐる。（「宣撫第一課」）

ここまで主に言及してきた三章（回）分がこの作品（物語）における前段だとすれば、ここにその冒頭を引いた「腕をうた

れた少年」（第四章／回）以降が、宣撫兵としての「私」の「日記」本篇であると言えよう。ここでは任務の合間にそれを回想して書く「私」の姿を自ら描き出し、又、「私たち」の範囲は、冒頭での集合的な兵隊の群れから、より実体的な宣撫班員――「宣撫第一課」員へと限定されており、その状態は、先に引いた作品末尾の、本隊への「私たち」合流まで続くこととなる。尤も、ここでも「私（たち）」がより大きな、あるいは上位のものの意を体現し、その股肱として動いている点には変わりがない。少し後の記述では、前任者が交代の際に「私」たちに残したという次のような言葉が拾われている。

『宣撫の目的は、けつきよく、皇軍のあたゝかい気持を支那の人々に知らせ、仲よく手をにぎり合つて、新秩序建設に進むやうにしようといふことにあるのですから、仕事はいくらでもあるわけです。だが、やつてみるとなか〳〵簡単なことではない。あなたがたもすぐそれに気がつくでせう。しかし、いくら戦闘に勝つても、宣撫がうまくいかず、いつまでも支那人がわれ〳〵と手をにぎつてくれなかつたら、新秩序建設はむづかしいのですから、宣撫はじつにたいせつな仕事です。根気よくやることです。』（同前）

そもそも「宣撫」とは語義的にも、「①正しい道理や政府の方針などを知らせて、人々の心を安定させること。②占領地区で、そこの住民に、自国の意思を正しく理解させて、人心を安定させること。」（『日本国語大辞典』初版）ということで、上意下達のニュアンスを強く含む。傍線部から明らかな如く、ここでのそれも発想の根柢は自分たち「皇軍」という優位者からする恩恵の施しとしてあり、にも関わらずそれが宛も被支配者の側から〈自発的に〉行われるように仕向ける――少くともそのように装わねばならないのであるから、なるほどそれは「なか〳〵簡単なことではない」であろう。

宣撫班の具体的な実践の第一は、無料診療所を地方都市で経営することにあった。その際使われた「施療」という語にも、この「施し」のニュアンスが強く漂っている。[7]「私たちの、宣撫第一課」が滞在することになった「〇〇県城」の「ゐなかの町」には、「福仁病院」というキリスト教会附属の英国系医院が既にある（『宣撫第一課』）のだが、そこは「かなり高い費用をとるといふ」（同章／回「新たな戦ひ」）ので、それに対し無料という点で勝負を賭けたのである。尤も、軍医等医療従事者を専属に擁するのでもなく、現地の言葉すら満足に理解しない「私たち」一介の兵隊による「宣撫班施療部」[8]は当初苦戦を強いられる。初めのうち自分らの患者であった「腕をうたれた（王）少年」が、県政府からの見舞金が出た途端に福仁病院へ行くようになってしまい、その金が尽きたとき再びこちらに舞い戻って来たことを知った「私」は次のように内省する。

とにかく福仁病院は、高い金はとるけれども、悪いことをしてゐるのではない。この医者のゐない田舎の町で病人をなほしてやるといふ、いゝことをしてきたのだ。そして、そこには病院としてのりつぱな設備も、人々が安心してか

よへる技術もあるにちがひない。／　英国も米国も、本国はあんなに遠い。しかも彼らは、こんな支那の奥地に来て、人々からありがたがられ、尊敬されながら金をまうけてゐる。／　彼らはそのかげで、たしかに支那をくひものにする大悪事を働いてゐる。それはふつうの支那人は気づかない。／　だが私たちは、英米人の悪い横着なところだけをせめる前に、少し考へなければならないことがある。／　日本人は、これまで支那人にありがたがられるやうなどんなことをしたことがあるか。となり国でありながら、何をぼんやりしてゐたのか。支那のことをよく知つてゐる人が、いつたい何人あつたか。――

いや〳〵、私たちは今さらそんなことをさけぶよりも、これからだ。私たちとしては、どうしても宣撫班施療部をもつとりつぱなものにし、人々の信用を集めるやうに努力しなくてはならない。これは、今や私たち宣撫班にあたへられた、大きな任務である。（「新たな戦ひ」）

過去への反省から未来の建設へ、という、一見尤もらしい方向性がここには示されている。だがそれは、考えるまでもなく現在の行為――侵略戦争への全面的信頼の上に成り立っているのである。この点は無前提であるというよりも寧ろ、（悪い）過去からの回復・「東亜新秩序」建設という〈明るい〉未来への投機を担保として、現在に一切の疑問を抱かず、その中で最大限奮闘することに自分（ら）の本分を見出すという、本論で最初に見たのと同様の構図に拠るのだろう。又ここからは更に、実は英米のようになりたい、より厳密には、過去から現在に至るまで、大陸で彼らが得てきた二重の利益（「人々からありがたがられ、尊敬されながら金をまうけ」る）を自分たちが代わって得たいという、国家レヴェルでの願望（それは維新以来の帝国の宿願のようなものだ）が透けて見えもする。

また、引用の前半における比較的正確な現状分析に比して、後段に示される方向性がやや具体性を欠いた理念・精神論に傾斜してゆくのも作品全体に通底する特徴として指摘されよう。これにすぐ続く記述で、福仁病院の英人医師「ハッチンソン」が「私たち」を用事で訪ねてくる場面がある。初めに彼の使った「すこぶるなめらかな支那語」を「少しもわからな」い「私たち」は、結局「三人がかり」の英語で彼に対応することになる。「施療の方は、いかゞです。おたがひに神のしもべとして、不幸な人々のために働きませう。」「では、また来ます。グッド・バイ。」と言って彼が去った後で、「私」たちは「負けてなるものか。私たちの新たな戦ひは、これからはじまるのだ。」と闘志を燃やしているのだが、それに次いで「施療部をりつぱなものに」するために考えられているのは、次のようなことだ。

第一に私たちは大きな熱情と愛をそゝがなくてはならない。薬品も設備ももつととゝのへ、やがてはこれを大きな病院にしなくてはならない。／　将来は、どうしても専門の医師がほしい。なるべく日本人の医師がよい。／　りつぱな技術をもち、正義と愛にもえ、ハッチンソンよりも強

い意気とかくごをもつ日本人の医師はゐないか。

私たちは、大国民である。正面から軍の力をもつて福仁病院をおさへるやうなことはすまい。しかし、やがて私たちの病院ができあがつた時には、福仁病院の英国旗は、きつとしぜんにその光をうしなつて行くであらう。（同前）

医療設備と技術、そして精神面は強く強調されているものの、ハッチンソン側にあって自分らに欠けていたもの――現地語の理解ということはまるで問題とされていない。先の引用部では「人々の信用を集めるやうに努力しなくてはならない」と言いながら、それは物資とサービスの提供で事足りると認識するかの如くである。これより先に「私たちの、宣撫第一課は、支那語と、医術の勉強からはじまつた。」とはあるもの、それは「肚子（腹）だの、耳朶（耳）だの薬だのといふ言葉」という実務上必要なものに限られ、「言葉もかんたんなことはなんとか通じる」（「宣撫第一課」）ことに安んじて、そのレヴェルに留まっていたかのようだ。（その後「私たち」の語学力向上について明瞭な記述はないが、その不在を以てこのように推定する）。このあたりの意識の低さに、「宣撫」という行為自体、延いては日本の占領統治政策の本質的問題が見えてくるように思う。

続く「野菊の墓」（第五章／回）で語られるエピソードもまた、「私たち」のこの大陸での行為が欲望していることの本質的な捩れと、それに対する正当化――というよりも、それにすら気づかない無邪気な信念のようなものを端的に示している。

発端は、「私たち」が宣撫班在所の近くに「皇軍兵士の墓標」を見つけたことであった。その墓が、そばにある民家から出る塵芥によって汚れることを知った「私」たちは、その家の主人に対して注意するが、そこの「おやぢ」は「へら〳〵とおせじ笑をしながら、あひかはらずぺこ〳〵頭ばかりさげてゐ」ながら、肝腎の注意にはまるで馬耳東風といった有様である。それを見ていた「私」は次のように考える。

いや〳〵、私たちの気持を支那の人たちにしひるのが第一まちがつてゐるのかも知れない。／ 私たちは日本のためにかうして働いてゐる。それはまた、支那をりつぱにしようとして働いてゐることだ、とかたく信じてゐる、この戦友も、日本のため、そしてまた支那のために働いて死んだのだ。しかし、それがわかつてゐてくれる支那人が、幾人ゐるだらう。私たちはそれをわかつてもらひ、心から手をにぎり合ふやうにしようと、一生けんめいになつてゐる。それが私たちの仕事なのだ。／ だが、これはなか〳〵かんたんなことではない。こゝにもまた宣撫のむづかしさのあることを、おやぢの顔を見ながら、私たちはつく〴〵感じたのである。（「川ばたの墓」）

ここで「日本のため」が無条件に「支那のため」に直結していることは改めて指摘するまでもない。「私たち」の一人「若い佐々一等兵」は「おやぢ」に「この町のため、つまり君たちをまもるために戦つて死んだ兵隊のお墓なんだぜ。君たちも少

しは感謝の気持をもつて、いはれなくてもさうぢくらゐしてくれてもよささうなもんだ」と言っているが（後に「私」も現地の子供に同様のことを言う）、この町にとっての災厄の原因がそもそも「私たち」――「皇軍」にあるとは、（当然だが）思い至らないようだ。このことは、後に自分たちがある村に入って行ったとき、それを見た村人たちが一斉に逃げ出すのを目撃して「何事が起つたのだらう？」と「あつけにとられ」たり、次いで「村人たちは、日本軍といふものをまだ知らなかつたのだ。いつも匪賊に苦しめられてゐるので、私たちのすがたを見て、匪賊だと思つたのにちがひない」（第八章／七回「敵地の村」中「逃げる村人」）と無邪気に考えているあたりに、端無くも顕れている。則ち、他ならぬ自分たち「日本軍」が現れたからこそ、村人が逃げ去ったという発想は当初全く念頭に浮かばないのである。

話を戻すと、だが、この作品に固有の問題は寧ろその次の展開にある。「私」たちは町の小学校に施療に行くようになり、それから三四日して又例の墓を見ると、清掃と献花がしてある。後にそれが、「私」たちの治療した子供たちによる行為であることが判明したとき、「私」は次のような感慨を抱くのである。

墓に花をそなへてゐる子供のすがたを見た時、私の心にはりくつなしにあたゝかいものが流れた。子供たちにもなんのりくつもなかつたかもしれない。しかし、たしかにこれは美しい心である。あのばくちのすきな、不潔な、シラクモだらけの、ぼかんとした支那の子供にも、この美しい心がひそんでゐた。私は胸に、ぱつと明るい光がさしてきたやうに感じた。（略）／　私たちは支那のおとなにたいして、がつかりした。次には子供にまでがつかりしようとした。けれどもおとなはどうであつても、子供にまで望をうしなふことはない。

墓に花をそなへるこの美しさが心にあれば、支那はまだ大丈夫である。私たち日本人の持つてゐる深い気持を、いつかはきつとさとつてくれるであらう。／　私は勇気がでた。今日はひじやうに楽しい。（「野菊」）

任務としての「宣撫」行為は大人子供を共にその対象として行いながら、「私」の（個人的）期待の眼差しは子供たち（の担うべき未来）へとより強く向けられている。ここで、先の読者――「日本の少年たち」への呼びかけを想起してもよいだろう。又、後の部分では、ある集落の子供たちを見た「私」は、「遠い日本にゐる私の子供たちのことを思ひだした」りもしている（第六章「討伐戦」中「もえる火」）。

四　「東亜新秩序の建設」――「私」たちの行く手

作品の後半、「討伐戦」の章以降、物語は一般向け手記（日記）型兵隊小説同様に、移動（行軍）と駐屯、その際の体験・見聞を連ねた展開となる。それらの多くと違う点といえば、積極的戦闘行為（発砲等）の少ないことと、その代わりに宣撫行

為がこれに加わることであろう。当初、その叙述内容も前半の医療行為（勿論それ自体は続いている模様）に換えて、宣伝工作の様子が中心に――具体的に例えば、「東亜新秩序の建設、皇軍の使命といふやうなことを」村人たちに「わかりやすくせつめい」するための紙芝居「楊先生的幸福（ヤンシェンスンデシンフ）」の創作・実演（「楊先生的幸福」）や、「『匪賊を追ひはらへ』といふ漫画のビラをまいた」（「もえる火」）り、敵「遊撃隊のビラ」を「ひつぺがし、その後へ私たちのビラ」即ち「道路をつくつて、匪賊を追ひはらへ。」「日本軍は農民のみかただ。」というのや、「日本兵と支那の子供が仲よく遊んでゐる色ずりのゑ[9]」などを貼り付ける（前出「逃げる村人」）、などといったことに関する記述が多くなる。

ここでもやはり子ども（の取り込み）が重視されている様子が見られるが、掲げられる（第一義的な）目的としては、「このふきんの人々を、再び匪賊の手にかへしてはならぬ。私たちの手に、しっかりにぎらなくてはならぬ。」（「もえる火」）ということであって、ここに漸く「私たち」の「宣撫」は大衆啓蒙的な趣きを強く帯びるところとなる。

ところで、作中に何度も出てくる「新東亜建設」というのは勿論抽象度の高い譬喩であるが、この作品の舞台である中国大陸ではある程度現実的（具体的）側面をも持っている。前出「敵地の村」は、その章全体として「私」たち数名が道路工事着工を前に現地に偵察に行くという話だが、その最後は以下のような「私」の感慨で纏められる。

今日一日で、道路といふもののたいせつさが、つくづくわかつた。（略）

道路が悪いために、支那の文明はおくれた。いや、支那の政治が悪いために、道路ができなかつたのかもしれない。どつちにしても、支那の人々は、そのために昔からどのくらゐ苦しみをなめてきたことであらう。／　私は、導家店道路のでき上つた時のことを思つてみた。何年かの後、この県内へたてよこに大道路がつくられる日のことをさうざうしてみた。／　匪賊はもうたえてしまつてゐるであらう。学校もできてゐるであらう。農作物を山づみにしたトラツクが、県城へむけて走つてゐるであらう。

その時こそ、新東亜建設はでき上るのだ。／　私たちは、その第一の杭をうたうとしてゐるのだ。全力をあげてやらう。／　たとへ一粁でも二粁でも、いや百米でも二百米でも、道路ができたらできただけ、新秩序建設戦は進んで行くのだ。（「敵襲」）

支那の文明の遅れが政治の悪さに結び付けられ、「人々」――一般人民はその被害者とされる。従って「私たち」（「皇軍」）の仕事は、現行の蔣政権を滅ぼし、そのもとで「苦しみをなめてきた」人々を〈解放〉すること。一方で、道路等ハード面で「文明」を構築する（底にある意識としては、してやる）ことにあるというのだろう。「新秩序建設」とは、前述の人心掌握（更改）のようなソフト面と、このような主にハード面を併せての称である。両者が根柢に於て結びついていること

は、主に前者を担う宣撫班の「私」がここに駆り出されていることからも分かる。

こうした発想は、続く「戦友のかばねを越えて」（第九章／第八（最終）回）で描出される「県政府の成立祝賀式」における知事挨拶や、来賓である「谷山部隊長」の祝辞（共に「日支親善」が強調されている）にも見られるが、こうした（物語設定上の）引用よりも、「私」の体験・見聞に基づいて導かれた先のような言説の方が、読者に訴える力を持ったであろうし、当然その点は計算に入れられていたであろう。実際この章（回）はタイトルの示す通り、（元）仲間二人（「柿川と杉内」。尚、「私」は宣撫班付のため所属隊を離れていた）の戦死の譚を核としており、更に彼らと行動を共にしていた別の仲間（堀井一等兵）に、戦友を殺された憎しみに続けて次のように言わせている。

だが、戦闘がをはつて帰つてきて、良民の顔を見ると、その気持はきえた。支那兵はにくい。しかし、良民たちにたいしてはにくしみの気持はどうしても起らないのだ。僕たちはこの支那の国の大さうぢをしてやり、支那人たちとほんたうの仲よしになるために戦つてゐる。ほら、あんなにうれしさうにして行列を見てゐる支那人たちの顔を見ろ。あの顔を僕はとてもにくめない。（「かばねの上に」[10]）

これに対し「私」は全面的に同意し、「柿川たちのさうれつな最期に心をうたれ、そしてまた堀井の言葉にも大きなかんどうをおぼえ」る。「日本の軍人は皆このやうなりつぱな心をもつて戦つてゐる」ことが、「聖戦」という言葉を裏書きするのだそうだ。更にそれは「宣撫といひ、建設といつても、それはわが武力なくしてできたものではない。皇軍の威力をもつて敵をたふした後、これらの建設の実はむすばれるのだ。」と纏められ（同前）、ここに日本が大陸で行っていること――武力による侵略とその後の懐柔という、硬軟二様の手段の相補的必然性が改めて説かれると共に、その先後関係が明かされるところとなる。先には「いくら戦闘に勝つても、宣撫がうまくいかず、いつまでも支那人がわれ〳〵と手をにぎつてくれなかつたら、新秩序建設はむづかしいのですから、宣撫はじつにたいせつな仕事です。」とあったが、今度はちょうどそのコインの裏面を言うわけである。

又、これは「皇軍将兵のたふとい血潮が流されてはじめて新秩序建設は進む。（略）私たちは彼ら戦友たちのたふといかばねをいしずゑとし、それをのりこえ〳〵、さらに大きな建設に向かつて進まなければならぬ。」というように、戦死者を必要な犠牲として、祀り上げつつカリキュラムの中に組み込んでゆくその過程で要請された言説でもあるだろう。[11]

しかし続く第十章「とらはれた県知事」では、宣撫班としての「私たち」の重責の第一は、やはり宣伝戦にあることが改めて語られる。ここでは前出「周文化」の話や、「東京は、もう味方の者が占領したと上官から聞いて」その「警備に行く」途中で捕えられた支那兵捕虜の話から、私は次のように考える。

笑ひごとではない。支那兵は、ほんたうのことは何も知らないのだ。戦ふたびにまけてゐながら、勝つた〳〵とをしへられてゐる。富士山を廬山とまちがへるやうな何も知らない兵隊たちに、勝つた〳〵とうそばかりをしへ、いみのない『焦土抗戦』に追ひこんでゐる蔣介石！――私はこれらの話をきくたびに、蔣介石はにくいと思つた。（「東京警備」）

後の視点からは、ここにはまるで太平洋戦争後期の日本の姿が預言されているかのように見えるが、作品同時代にその意識は勿論ないであろう。作中「私」はここに「『宣伝の力』といふものゝ大きさをつく〴〵感じ」る。そして「私たちは思ふ、私たち宣撫班の任務はいよ〳〵重い。私たちはこれらの人々に、ほんたうのことを知らせ、人々を東亜新秩序建設の道へみちびかなければならないのだ。」「私たちはもつと〳〵多くの人を目ざめさせなくてはならぬ。これが、私たちの任務だ。」（以上「目ざめた人」）と繰り返し強調してこの章が纏められるのだが、ここにいう「ほんたうのこと」とは何か、「目ざめた」先に何があるのか、具体的・明瞭なことは一切語られぬまま、ただひたすら「東亜新秩序」という理念だけが高く掲げられるのである。

この章の前半（「周文化」）で、「五桂市の討伐」における同僚日本兵の勇敢な（立場を替えて言えば残虐な）戦いぶりが、（会話という設定上の必然でもあるが）かなり克明に描出されることと併せ、以上から見えてくるあり方を纏めると、「皇軍兵士」の勇猛な戦いぶりと地元一般人民（文中では「良民」）に対してみせる優しさを前提に、「私たち」宣撫班が蔣政権によって「うそばかりをしへ」られた人々を、自分たちの側の「正しい」道へ教え導くという図式、しかもその終着点の内実は殆ど空白のままにそれが繰り返し強調されるという構成を、この作品は持っている。更に言えば、その空白性は今更語る必要のないもの、模範的な「少国民」（初出誌『少年倶楽部』読者はその代表とされる。注6など参照）であれば当然既に理解しているものという、これまた自明の（とされる）前提に立ってのものだろう。「皇国」日本は正しい。それが掲げる「東亜新秩序」というものは疑いなくよいものであって、その実現のためには目前の敵――蔣政権とそちら側の軍隊を打ち破る一方で、一般人民とは宥和をはかり、自分たちの「高い」レヴェルにまで引き上げてやらねばならない、という発想である。

このように、読者への理念（それこそメタ＝レヴェルでの「宣伝」である）を前面に出してしまった後では、残る「さる日近し」と「姑々焼火（クシヤオホ）」の二章はエピローグ以上のものではない、という見方もあるいはできよう。実際、既述の通りこの部分を含む最後三章は初出時にはなく、後の単行本化に際して加えられたものであった。そこには「私」の宣撫班での仲間であった小山上等兵と地元の少年の交流、特に小山戦死後も彼を慕ってやって来る少年の様子、及び「私」が治療してやったやはり地元の少女との心的つながりがそれぞれ描かれており、読み切り連載――独立性の高い各エピソードの連環――という初出形態の延長上に（書き加えられた）これらを読んだ場合、やや

厳しい見方をすればそれらは今までに何度も使用されてきたパターンの焼き直しに過ぎないとも言える。

だが、単行本として一括された本文（テクスト）では、全体的構成までもが意識されるであろうし、亦読み手もそれを意識せざるを得ない。そこで、この部分を含めて改めて全体を見渡して見た場合、そこにはちょうど螺旋のように循環しながら少しずつ進んで行く物語構造の中に、試行錯誤を繰り返しながら、しかし確実に歩を進めていく「私」たちの「戦場」での行為とその成果の記録（これ即ち「日記」である）を、より厳密には、そのような記述への志向の表れを認めることができるだろう。そうした中、末尾二章は最後に「私たちの長い間の宣撫の仕事は、どういふ成績をあげたかはしらない。」と言いつつも、少くとも自己採点では一定の成果を認め、「私は私の命のあるかぎり新東亜のために戦はう。そして、君たち（引用注／ここではもう少し広く「〇〇県城の人々」）のことを、命のあるかぎり思ひだすだらう。」（前掲）という決意も新たに、本隊へと合流するために「前線へ」旅立つという場面に繋ぐためにある。この間のダイナミズムについては前に述べた通りである。

注

（1）同賞の概略や性質、又そこでの赤川受賞の文脈的蓋然性については、五島「講談社的〈作家権〉ビジネスの一様相――野間文芸奨励賞とその周辺――」（近代文学合同研究会論集第1号『新人賞・可視化される〈作家権〉』　同会　二〇〇四・十）を参照。

（2）「戦場精神と必勝の国民生活を語る」（『キング』昭和十八年二月）「荒鷲百人を育てた熱血訓導を訪ふ」（同誌　同年十二月）、「我が死所ブナにあり（陸戦の神安田部隊長）」（『海軍』昭和十九年六・七月）、「鉄脚の若鷲」（『若桜』昭和十九年五月）など。

尚、『海軍』に関しては、山本明「一五年戦争末期の雑誌（二）――大日本雄弁会講談社刊『海軍』――」（『評論・社会科学』昭和五十九年五月）が詳しく、総目次も掲げられている。『若桜』については、『三田國文』第四十四号（平成十八年十二月刊行予定）に改題と内容細目を発表の予定。

（3）初刊単行本には章番号は振られていないが、本論では便宜的にそれを付す。単行本各章と初出連載の関聯については、稿末の対応表参照。

（4）同作は、各章（あるいは連載各回）ごとにタイトルを持つ上、それを更に細分して小見出し（節題）が付けられている。以下、引用箇所を示すために、この章題・節題の順で、あるいはこのように節題のみを挙げる。

（5）「分隊長の手記」は『大衆文芸』昭和十四年三月号から同十五年六月号まで連載、その前半を纏めた単行書『分隊長の手記』が昭和十四年十一月に新小説社より刊行された。以下本論での同作を巡る言及については、五島「民と兵隊――棟田博『分隊長の手記』と兵隊小説ブーム」（大衆文化研究会編『大衆文学の領域』　同会　二〇〇五・六）を参照。

（6）これに関しては、初出誌の読者が基本的に男児に限定される（同時期講談社は他に『少女倶楽部』『幼年倶楽部』を出しており、その間の棲み分けが前提として準備されていた）ことから一見当たり前のように見えなくもないが、それは「君たち」――「日本の少年」という結びつきはともかく、協力すべき対象を「支那の少年たち」と限定する（同「少女」を排除する）理由にはならない。

又、初出形ではこの部分に傍線部の（それに相当する）記述がないが、これは初出テクストがそうした発想を持たないという意味では決してなく、寧ろその媒体としての雑誌面（具体的には他の記事や創作、更には広告に至るまで）にそうした言説・発想が過剰に溢れていた（この点に関しては、近代文学合同研究会　第六回シンポ

ジウム「〈講談社〉ネットワークと読者」（平成十七年十月一日　於慶應義塾大学）にて行った口頭発表「戦時『新体制』下の『少年倶楽部』と読者たち」にて検証を行った。その内容の一部を纏めた、近代文学合同研究会論集第3号『〈講談社〉ネットワークと読者（仮）』（同会　二〇〇六・十予定）所収「対米開戦前夜の『少年倶楽部』と読者たち」も参照されたい）ために、言わずもがなのこととして敢えて触れられなかったものと考える。

（7）「【施療】　①貧しい病人などを無料で治療すること。②病気などの治療をすること。」（『日本国語大辞典』初版　用例略）

（8）この点に対する「私」の認識は、後に「（班内の）誰が治療してもかくべつちがってはゐない」（第十二章「姑々焼火」中「布穀と少女」）と述べているあたりから窺える。

（9）連載と同時期の『少年倶楽部』（昭和十六年一月～同十七年十二月）では漫画「ほがらか王君（ワン）」が連載（各回読み切り）されていた。その内容は正しく「日本兵と支那の子供（王兄弟）が仲よく遊」ぶというものである。

（10）長谷川潮は同じ部分を引き、又他作品の名を挙げつつ、これが同時代の、（限定すれば）児童向け読み物においても、定型の言説図式であったことを指摘している（『日本の戦争児童文学』（久山社一九九五・六）　三〇頁）。

（11）連載同時期の『少年倶楽部』では、陸軍省・海軍省・軍事保護院後援で「靖国神社の英霊にさゝげる文」を募集（『幼年倶楽部』『少女倶楽部』と合同企画）、昭和十六年五月号で入選作を発表している。

附　『僕の戦場日記』単行本と初出「私の戦場日記」各章対応表

単行本	初出
第一章　「揚子江をさかのぼりつゝ」	第一回（『少年倶楽部』昭和十六年二月）「揚子江を遡りつゝ」
第二章　「焦土の子たち」	第二回（同三月）
第三章　「軍曹の戦死」	第三回（同四月）
第四章　「腕をうたれた少年」	第四回（同五月）「腕を射たれた少年」
第五章　「野菊の墓」	第五回（同六月）
第六章　「討伐戦」	なし
第七章　「慰問袋と兵隊」	第六回（同七月）
第八章　「敵地の村」	第七回（同八月）
第九章　「戦友のかばねを越えて」	第八回（同九月）「戦友の屍を越えて」
第十章　「とらはれた県知事」	なし
第十一章「さる日近し」	なし
第十二章「姑々焼火」	なし

※　引用に際し字体を通行のものに改め、ルビは適宜省略した。